



contents

式典当日次第

.....

2

講師プロフィール

.....

3

記念講演「産業社会における大学の役割」

.....

4

式典当日次第

式典名称…新潟県立大学創立10周年・創基56周年記念式典

開催日時…令和元年10月25日（金）13時30分～19時

会場…ANAクラウンプラザホテル新潟（飛翔の間）

記念式典（13：30～14：00）

- 1 ヴァイオリン&ピアノ演奏 エルガー…愛の挨拶
ヴァイオリン 佐々木友子 ピアノ 石井玲子
- 2 挨拶 若杉隆平 新潟県立大学学長
- 3 祝辞 花角英世 新潟県知事
祝辞 玉上 晃 文部科学省大臣官房審議官
- 4 祝電披露
- 5 学生歌合唱 新潟県立大学学生歌「明日の向こうへ」

記念講演（14：20～15：20）

演題「産業社会における大学の役割」
講師 猪木 武徳 大阪大学名誉教授

シンポジウム（15：40～17：10）

演題「グローバル化時代の地域社会と大学の役割」
登壇者（五十音順）
猪木 武徳 大阪大学名誉教授
小田 敏三 株式会社新潟日報社 代表取締役社長
玉上 晃 文部科学省大臣官房審議官
吉田 至夫 新潟経済同友会代表幹事
（株式会社新潟クボタ 代表取締役社長）
若杉 隆平 新潟県立大学学長
モデレーター 黒田 俊郎 新潟県立大学副学長

祝賀会（17：30～19：00）

講師

大阪大学名誉教授

猪木 いのき

武徳 たけのり

氏



■猪木 武徳 氏 プロフィール
○略 歴

- 1945年 滋賀県に生まれる
- 1968年 京都大学経済学部 卒業
- 1974年 米国マサチューセッツ工科大学大学院修了 (Ph. D.)
- 1987年 大阪大学経済学部教授
- 1995年 大阪大学経済学部部長 (1997年)
- 2002年 国際日本文化研究センター教授、大阪大学名誉教授
- 2007年 日本経済学会会長 (2008年)
- 2008年 国際日本文化研究センター所長 (2012年)
- 2012年 青山学院大学大学院特任教授 (2016年)
- 2019年度 文化功労者

○主な著書

- 『経済思想』 1987年 (岩波書店)
- 『自由と秩序―競争社会の二つの顔』 2001年 (中央公論新社)
- 『大学の反省』 2009年 (NTT出版)
- 『戦後世界経済史 自由と平等の視点から』 2009年 (中公新書)
- 『自由の思想史』 2016年 (新潮社)
- 『アモクラシーの宿命 歴史に何を学ぶのか』 2019年 (中央公論新社)
- Arno Press N.Y. 1981),
Human Resource Development in Twentieth-Century Japan
(Japan Library Series 2017)

記念講演 「産業社会における大学の役割」

皆さんこんにちは。ご紹介いただきました猪木です。新潟県立大学が創立10周年をお迎えになったこと、心からお祝い申し上げます。10年と一口に申ししましても、大変なご苦労がありましたと思います。教職員の皆様、そして新潟県民の各界の方の熱意と努力で10年、今の状態まで発展なされたこと、そして先程、若杉学長理事長がお話にありましたように、来年度から国際経済学部という新しい学部を発足なさるということで、そのような皆さまの熱意とご努力に心からの敬意を表したいと思います。

こういう大変おめでたい機会に、若杉学長との昔からのご縁もあり、お祝いを申し上げるべく喜んで駆けつけた次第です。どうぞよろしくお願いいたします。今日の私の話は、大学で学ぶ知恵とか知識とは何か、そして公立大学はこれからの日本社会でいかなる役割を担うのかというテーマです。

なぜわれわれは知恵を獲得しなければいけないか。我々人間はただ生きるだけでなく、ギリシャの哲学者が言ったように、善く生きるということが最終的な人生の大きな目標であるからです。善く生きるためには知恵と徳を備えなければなりません。これは古代ギリシャ哲学だけでなく、日本でも、知と徳を鍛錬するということが個人にとっても社会にとっても大事なことだということはしばしば言われてきました。個人の幸福も、単なる快楽にあるのではなく、知恵と徳のうちにあることが深く認識されてきました。

ちよつと青二才的なことを申しましたが、知を獲得しなければならぬとか、知恵を獲得しないと駄目だという場合も、知とは何かを、区別して考えるということが重要ではないかと考えます。

わかるというのは、分、という字を書きます。そのものが何か、ものの本質に少しでも迫ろうとすると、やっぱり物事を分けて考えていかなければならないと思います。お配りしました講演要旨のところ、アリストテレスの例を書きました。これは簡単に申しますと、我々はよく知育・徳育という言葉で、知と徳を最初から分けて考えていくわけですが、古代ギリシャの哲学者たちにとっては、実は知も徳も両方とも、そんなにハッキリと2つに分けられるものではなくて、徳のなかに実は知的なもの、道徳的なもの、両方含まれているとい

うことでした。徳は元來、抜きんできるとか、卓越性とか、力強さということの意味しました。その徳を備えることによって、先ほど申し上げたように善く生きる、ただ動物のように生きていくだけではなくて、善く生きるということを我々は目的とすべきだということを言ったわけです。

アリストテレスは、知を、学問的な認識とか直観とか、実践知とかいろいろ区分しています。学業の面での頭は良いものでも、実行の判断がよくないなどのこともあり、これらは別種の知だということに我々も気づいているわけです。政治の場における知恵とか、経済政策家はその政策を提言するときの知恵というのは、実践的な知に裏打ちされていないとあまり意味がないわけです。そういう学問的な知恵と別の実践知ということのアリストテレスは強調しております。実際に考えて行動することによって現れる知的なものとして説明したわけです。

こうした区別は大変参考になります。アリストテレスは、実際にはもっと細かく分けているのですけれども、知とは何かということの考察のなかで、最初の重要な分類であったと思います。

明治以降の日本でこの点に関してわかりやすい形で説いたのは福澤諭吉です。福澤はご存知のように、日本が西洋列強に屈することなく、いかに独立を維持できるかということに関して非常に深刻な危機感を持っていました。幕臣ではありませんでしたが、幕府を倒した新政府には仕えず、一民間人として教育事業、産業振興、メディアで活動した真の知識人です。「時事新報」という雑誌を刊行して言論界の発展にも大きな貢献をしました。その福澤は維新前の幕末に、欧州とアメリカを旅行しているわけですけれども、欧州に向かう途中で、中国、香港、それから東南アジア、そしてインドと船で通過して、西欧列強の植民地支配を受けた人々がいかに悲惨な状況に置かれているかということを目の当たりにするわけです。そのため、「日本の独立」というのは重大な火急の問題だと知るわけです。現代の我々には、その危機感は想像しにくいところもありますけれども、当時の一部の知識人はそういうことを大変恐れていたわけです。

技術文明の発達した西洋に政治的に支配されないためには、要するに文明をもっと日本は推し進めないと駄目だという論を福澤は展開するのです。そして、では、その文明というのは一体何かと福澤は問うのです。彼は、ただ闇雲に、「西欧に追いつけ」と言い募るわけではありません。文明とは、単に生活が豊かになって物質的な面で楽をするということだけではないんだと。実は品性、人間の品性を高尚にするということが同時に進まない、文明の進歩はありえないということを『文明論の概略』の冒頭でまず議論します。

では日本はそのためには一体何をすればいいか。彼は、知恵と徳を両方バランスを持って進めることが、文明の進歩につながるという論

を展開して行きます。彼の論は非常にわかりやすいのですけれども、それを更に私がちょっと図（巻末の当日配布資料参照）に書いてお示ししたのが、お手元に配られた表、公私知徳のマトリックスです。福沢の本文のなかにはこういう図は現れないのですけれども、本文をこういうマトリックスの形に落とし込んで図を書いてみました。

まず知と徳というのは、左側のインテレクトとモラルというものです。福澤のある種の独創性と言いますか、わかりやすさというのは、その知と徳をさらに大胆に二つに分割したところにあります。私と公という形に分割するのです。そうすると2かける2のマトリックスができて、4つのエレメントができ上ります。その各要素の説明は、下に書き出しました。算数でいうと第二象限になるんですか、左上の北西のところの象限からいきますと、私知、私の知恵です。これはものの理、理を極めてこれに応ずるの働きで、学校での勉強がよくできるという知を意味します。囲碁が強いとか、ソロバンできるとか、そういう知です。これを日本人は非常に重視してきた。福澤は口の悪い人ですから、碁が強いというのは碁智恵、算数がよくできるというのは算勘、つまり計算が早いということだということです。それが私知の第二象限です。

下に目を移していただきますと、下の方は私徳といって、これは一身のうちに属するもの、貞実、潔白、謙遜、律儀等、つまり自分に向かったの対自的な徳ですね。これも割に日本人は熱心なわけです。ここに書きましたけれども、金銭や異性関係のスキャンダルに対しては割に日本人は厳しいです。メディアも厳しい。そして政治家とか公人を射落とすかのように、こういう事をすぐに新聞に書き立てる。非常に私徳に関しては敏感なのです。

それに対して第三象限の私徳に優れているというのは、福澤に言わせると、これ当たり前のことで、そんなこと議論するよりもむしろ右の第4象限の公德というのを反省し議論しろと。それは外物に接して、人間の交際上に現れる徳。「人間」はここではニンゲンとは読まなくて、ジンカンと読むようです。ソサエティという言葉が、日本社会にはまだ維新の始まる頃に無かったので、ソサエティを人が交際すると捉えて、「人間交際」と訳したようです。

ソーシャルな徳ということでしょうね。外物に接して人と交流し、そのときに現れるところの働き。だから相手の気持ちを慮るとか、名誉とか恥を知っている、フェアであるとかか、それから勇気があるか、多くの人が議論をしていて、自分はそれに同ずることはできないというときに、堂々と反論をすることができるか、というような言論面での勇気も非常に大事なわけです。特に多事争論といって議論をするという勇気を言うわけです。

おもしろいと思うのは、福澤は、この左側の縦の私知、私徳というのは大事だけれども、文明の進歩にとって更に重要なのは右の公智公德だと指摘していることです。そして文明の進歩にとって特に重要なのは第一象限の公智だと言うわけです。この公智を、彼は図の括弧で書きましたように、聡明の大智と呼んでいます。これは言うは易く、難しい知恵で、いろいろ選択肢があるとき何が重要で何が重要ではないかを判断する、それから何が軽いか重いか、物事をどういう優先順序でやっていけばいいのか、その判断力です。価値判断と言ってもいいと思います。それが非常に重要だと福澤は強調するわけです。

この公智が文明の進歩にとって極めて大事だというのは、これ実はこの本は150年近く前に書かれていますけれども、現代でも重要な指針となる考えです。私のほうを重視して、公に關しての意識が少し薄いというのは、現代の日本社会でも今も残っている傾向ではないでしょうか。私的なことに熱心でいろいろなことをやるということに喝采拍手を送りますけれども、公的な徳や知はどうでしょうか。この点で興味深いのは、日本は殉教の思想がない国だったと言う福澤の指摘ですね。福沢の言う「マルチルダム」、殉教というのは、ご存知のように、自分の思想信条としての宗教のために、命を失うということです。完全に殉教の思想がなかったかどうかというのには、熊本や長崎のキリシタンの殉教の例がありますから、絶対的な命題として言えるかどうか問題は残ります。しかし西欧社会には日本よりも根強い伝統があったことは確かです。西洋では公のために、そして特に自分と同じ階級に属する人々のために命を投げうった人に対しての大変深く強い崇敬の念がある。日本にも義民というのがあります。正義の義に民と書いて義民というのは日本史にも出ています、佐倉の惣五郎とか、つまり自分と同じ農民階級への苛斂誅求、重い税金の軽減を直訴して、妻子共々打ち首になってしまおうという事件もあります。しかし人数からも強さから見ても、西洋の政治史や宗教思想のかなりの重要な部分というのは、そういう思想が重要な位置を占めている。

福澤が「文明論之概略」のなかで、木下藤吉郎が農民から立身出世して、大閥さんになって天下統一をしたことを、非常な努力をした立派な人物だというふう到我々日本人は考える。しかし木下藤吉郎の立身出世の話を西洋人にしても、それほどの共感を得ないはずだと言っている。自分と同じ階級に属する輩を打ち捨てて、先祖の墓も顧みずに自分だけ立身出世した非常に身勝手な不人情なやつだというコメントを西洋人からもらうだろうと。福澤独特の、議論を活性化するために、極論をしているという面もあります。ただなるほどと思うのは、私的な知恵、たとえば日本では受験秀才というのはすべてにおいて偉いように、同じクラスのなかでも重視されるといふか、そういう傾向はありませんか。外国ではどうか。勉強は勉強のほなしてあって、それ以外のもの、スポーツが優れているとか、作文を書かずと非常に立派な文章を書くとか、人から信頼されているとか、人を評価するときの基準が、この私知だけではない、多様であるということを感じるこ

とがあります。

全体的傾向としては、日本はやはり公的なもの、公智公德というものが全体の中で占めるウエイトがやや低い社会ではなかったか、と言えるのではないか。実はわたしは、この公智公德というのは、近年盛んに大学のカリキュラムや教育問題で議論されている教養とか、リベラルアーツというようなものと密接に関係していると考えています。この公智公德は教養教育を通して得られるものはかなり大きなウエイトを占めるものではないかと。

公智公德が、そういう教養、あるいはリベラルアーツ教育を通して身につくものであるとすれば、そもそも教養とか我々が言っているものは一体何だろうかということを考えることにもなります。先ほどのマトリックスの右側が教養の現われだと言ってしまう、それまでなのですけれども、それをもう少し学校教育と関連付けて具体的に考えてみたいと思います。

大学で何を学ぶかということを考える場合に、私は教養教育だけを強調しすぎるのも問題ですが、多面、厳密な論証の科学だけを教え込む、つまり数理的に何か証明できるとか、論理的に正しいかどうかということの訓練だけを施す、論理的な真だけの学問で若い人を鍛えるというのは、これもどうもバランスを失するような教育のカリキュラムになってしまふ。

我々の私生活、社会生活、そして政治や経済、あるいは文化の世界でも、数理的論証だけで我々は納得して行動しているわけではありません。昔、幾何学がどれほど我々の実際の生活に役に立つかどうかということを、ある文学者が議論していて、私にとっては「三角形の二辺の和が他の一辺よりも大きい」ということ以外は、実生活で応用出来た命題は無かったとユーモア交じりに語っていました。幾何学で勉強することのなかで、実際直接役に立つものはほんの少しなのです。しかし、幾何学の論理を軽く見ればならないのです。直接すぐ役に立たないからといって、それを軽んずることはできない。なぜかという、幾何学の証明で鍛えられた推論の力は、物事を論理的に考えるためには不可欠な力なのです。例えば法学部に進学されて、法律を適用しようとする場合も似たような論理的な推論が必要になります。法律ではこうだ、学説ではこうだ、判例ではこうなっていると、人を説得するときやっぱりそういう論理性というのが必ず要求されるのです。そういう意味でも、論証の科学というのは不可欠なのです。けれど、そうした分野の学問は、直接目に見える形ですぐ役立つというものではありません。

他方、我々の日々の生活で、例えば私自身、そろそろ後期高齢者ですけれども、これからあと2、3年どうなるのか、10年後、もし生きているとしたらどういう状態かというのは、これ極めて不確実な予想しかできない問いです。そういう予測がたいもの、情報が極めて少

なくて合理的な判断を拒否するような問題というのが、我々の身辺にたくさんあるわけです。ほとんどがそういう問題だと言ってもいいでしょう。ですから、そのなかでも、何らかの形で先ほど冒頭に申しましたように、善く生きるためにどの選択肢、道を進めばいいのかというのを我々は迷うわけです。迷うときに、一体何がその「道しるべ」になるかを考えると、一つはここに書きましたように、古典だと思うのです。古典というのは、クラシックスという意味の古典です。古典は読んですぐその面白さが分かるものでもないのですが、こういう時間を経ても残っている、そして一度で簡単に理解できないものと格闘しておく、ある種の精神の粘り強さみたいなものが身に着く。やはり古典からはわれわれが知と徳をたくさん学び取ることができるのです。

私はよく学生に言ってきたのですが、現代は出版される本の大洪水だと。出版業界、デジタル化が進んでいて今はあまり調子が良くないみたいですが、それでも情報の洪水というには変わりがないわけですよ。そのなかで本当に素晴らしいものがあるにしても、自分だけで選ぶとなると、どれがいいのかはわからない。100冊読んでそういうものに出会うか、あるいは出会わないか、そういうリスクを考えると、千年、二千年も昔から、この謎に満ちた人間とは一体何なのか。光の部分もあるし陰の部分もある、不思議な存在である人間を先人はどういうふう理解してきたのかということも少しでも学ぶ。読むと何かそこから日常ならざるものについても学ぶことができる。生活になんの変化もない状態であれば、ルーティンの仕事をマニュアル通りやればいい。しかし我々の生活というのはルーティンばかりではないですから、何かとんでもないことが起こり得るわけです。多くは悲劇的なケースが多いですけれども。そういうときに、どう対応するかという力は、やはりそういう人文学の古典的なテキストを読んで身に付けていることが、必ず役に立つのではないかと私は思うわけです。

昔、東大で美学・哲学を講じていらした今道友信先生から伺った話なのですが、クラシックスというのは、今ではクラシックス音楽とか古典的というふうに訳してしまいますけれど、元々はクラシックスというのは古代ローマの艦隊 (Fleet) を寄付する階級を意味したらしいです。どういうことかと言いますと、国の存亡にかかわるような危機にどう対応するかというときに、金持ち階級は軍備、軍事についての寄付を戦艦の形でやっただけです。ですから元々はクラシックスというラテン語の意味からいうと、危機に対応する力を持つことを意味しました。それに対して、金持ち階級じゃない、つまり貧民層は差し出すものがなかった。そこで父親は戦士として息子を差し出したのです。男の子を兵士として差し出す貧しい階級というのがプロレタリアリウス (proletarius) で、そこからプロレタリアートという言葉出てきたのです。いずれにしましても、クラシックスを、古典というふうにわれわれはすぐに訳してしまうわけですが、元々は危機に、国家

存亡のときに対応する力という語源を持っているのです。

このことから、危機に対応できる人材を育てるためにも、古典の教育が必要だということが分かります。大学で何を教えるかというところで、私が古典をベースにした教養を強調すると、それに反論される方が、やはりもっと役に立つことを大学で教えないとだめだとおっしゃいます。それは当然なのです。大学は社会のなかにあるわけですから、社会が何を要請しているか、何を求めているかということに鈍感であってはなりません。社会的要請に対する意識というのは持っている必要ありません。社会を意識し、その要請に対応すべきことはもちろんなのですが、変化する社会からの要請だけに流されないためには、古典教育なりリベラルアーツの教育というのは重要だということとを強調したいのです。

もう一つ、古典に少しでも親しむということに加えて、外国語の訓練の重要さも指摘したいと思います。新潟県立大学でも、先ほどのお話では、ロシア語、中国語、ハンゲル等々の教育をなさってきたというのは大事なことで素晴らしいと思います。と同時に、日本語で読み書きできる力をつけるということも大事だという意識も必要です。外国語はよく話すが、日本語を書くとおかしいというのは、これはやっぱり困りますね。コミュニケーション能力を高めるという意味で、外国語の教育も大事ですが、やっぱりもう一つ大事で忘れてはならないのは、日本語の文章の読解力です。外国語の会話ができるというのは、外国の方と話が弾んで、冗談でも雑談でも人と話をするというのは楽しいことですけれども、難しい日本語を少しでも読解する、それから正確で表現力のある文章を書くことができるという日本語のトレーニングも、外国語教育と同じように重要なのです。

先ほど「真理」と「真らしさ」を分けました。数理的「真理」をベースに置くサイエンス、エンジニアリング教育は、科学技術の発展のためにも重要な国策の一つの柱です。それに傾注することは大事だけれども、それ以外のものに、つまり我々はどう生きるかという問題を考えるときに遭遇する「真らしさ」に向かい合うことも大事なことです。その一つの例として、ここに英語で引用しましたけれど（巻末の当日配布資料参照）、ステイブ・ジョブズという有名な、アップルを共同で立ち上げて、一時はアップルを追い出されて、ピクサーというジョージ・ルーカスの会社を買収、そのあとまたアップルに戻って、大変残念なことに、若くして亡くなりました。彼の発言などを知り、どういう人物かと思って自伝を読みました。やはり素晴らしい人物なんですね。ご存知の方も多いと思いますが、彼は大学のドロップアウトです、リード・カレッジという大学に入って、おもしろくなかったんでしょね、1年生でドロップアウトしたのです。しかしそれで彼の知的発展がストップしたわけではなくて、彼は特別学生という、聴講生として、美学とかリベラルアーツ系統の授業を受けているの

です。彼のフォントや書体なんかの研究というのは、彼の美学とか美術史で学んだこと、あるいはカリグラフィという書体学からいろいろ学びとったことが、彼のビジネス自体に強く反映されていることを知る事ができました。ジョブズは、自分がソニーに勝つことができたのは、美学の力だと言っています。自分のような技術開発をする、リベラルアーツのバックグラウンドをもつ技術者が日本になかったのではないか。ソニーに勝つことができたのはそのためだと言っています。ここに書きましたように、技術だけじゃ不十分だと。テクノロジというのは、リベラルアーツと一緒にになり、ヒューマニティズと一緒に初めて人の心を躍らすような、素晴らしいアウトプットが、デザインが生まれるのだと。人文と技術エンジニアリングのインターセクションを求めるような知的探求というものが彼を刺激し、奮い立たせたということなのです。

彼がオークランドのデルモンテという缶詰工場でしょうね。その建物を3棟買い上げて、ピクサーの新しいコンセプトでもって職場を作り上げるときに、彼は強く、別々の仕事しているコンピュータ・サイエンティスト、デザイナー、アーティストたちが必ず、接触できるような大きな空間を建物内に作れということ主張したそうです。新しいピクサーの建物のデザインはそういう形で実現したということです。異なる職種の人たちが集まるコモンスペース、どうしても自分とは別の職種の人がぶつかって何かを話す、そういう空間を作れということとを主張して、トイレの位置にまでこだわったそうです。そういうテクノロジとヒューマニティのインターセクション、テクノロジのなかでも違う分野の仕事をしている人同士が接触する機会、接する場所を物理的空間として作り上げろということに大変こだわったということです。

ですから、今まで申し上げてきたように、論理上の「真理」も大事だけれども、「真らしさ」というものも大事だと彼は考えていたのです。あらゆる問題は技術的な面と美的側面があり、そのバランスをいかに保つかということが大事だと考えたのです。振り子が逆に振れたときに、振り過ぎて糸が切れてしまうような場合がある。大事なものはどれもやっぱり欠陥があるのです。完全じゃないわけです。欠点があるものを、お互いに補完、補い合うような形で一つの考えなり、製品なりを仕上げていくということが大事なのです。

私は仕事柄、しばしば外国の大学を訪れることがありました。今年もバークレー、それからスタンフォード大学に行く機会がありました。私は外国の大学に行くと、よくその大学の生活協同組合の書籍部や近くの書店に行って、どういう書籍が読まれているのか、どういうテキストブックが使われているかを見ることがあります。ところが、最近ちょっと驚いたことは、みんなテキストブックが一種のデジタル化されてしまつて、ハードコピーが減ってきているのです。だから今年の夏に行つたときには、生協の書籍部自体が縮小して本をじっくり見る

機会は少なかったのですけれど、概して若い学生が読んでいるのは、解説書ではなくて、古典の原点そのものが多いのです。日本と違う点は、歴史とか思想とか、学説史といった「真らしい」分野のところを見ると、原典しか置いてないです。例えばアダム・スミスの『国富論』が置いてある。こちら元々英語で書かれた本ですから、英語の国富論が置いてあるわけです。ケインズのエッセイ集が置いてある。日本との違いは、日本はだいたいこうした古典の解説本を使うことがほとんどです。ケインズの思想はこういう思想であった、あるいはアダム・スミスの考え方はこうであったと。もちろん論理的「真理」を扱う「理論」を勉強するためには、別途に優れたテキストブックが書かれています。例えば国際経済学だったら、非常に分厚い例のクルーグマンという人の書いたテキストだとか、ミクロ経済学、マクロ経済学だと分かりやすく書かれたテキストがたくさんあるのです。

ですけれども、一般に歴史や思想を扱う分野では、よい解説やガイドはある程度必要でしょうが、原典に全く向き合うことなく、解説本を読んでもそのものを知ったと思うのはよくないと私は学生に言ってきました。アダム・スミスを、最後まで独りで全部読むというのは大変ですから。誰か友人と読書会みたいな形で最後までたどり着くというのでしたら可能かもしれません。解説本を読んで本物だと思ってしまうというのは、これはちょっと残念ですよ。石清水八幡宮を拝みに行つて、まだ上の奥のほうに本当の八幡様がいるのに、石段下で帰ってくるという話がありましたね、徒然草でしたか。「先達は、あらまほしことかな」と。だからマルクスを読むのだったら、あるいはアダム・スミスを読むのであれば、そのものを読んでみて、という精神がやはり我々の教育の中で軽視されてはいけません。本物に少しでも触れようとする意欲、何か難しいものに挑戦しようという気合だけでも立派だと思えます。誰かに嘯んでもらつて、食べやすくなってから口にするのであれば、知的な粘り強さが身につかないのではないかと。日本の大学は学部間の縦割りが強くて、学生も学部が違えばなかなか出会うことが難しい。半世紀以上前の私の学生時代も、何かのサークルに属しないと、他学部の人と接するっていうことあんまりなかった。私は二つほどそういう研究会なり、読書サークルに属して、他学部の人という接し、非常に楽しく勉強になったという記憶があります。

ですからさきほどのステイブ・ジョブズの職場のデザインじゃないですけど、何か違うことを目指している、あるいは違う仕事をしている人と接するっていうことは、いかに我々の知的理解を広め、深めてくれるかということ強調したいと思います。

知とか知力とか、能力といつてもいろいろなタイプがある。あの人は頭がいいと言つても、いろいろな意味があるわけです。くるくる頭が回転する、空回りかもしれない。非常にスローだけれども、ゆっくり深く考える人とか。頭の良さというのはいろいろなタイプが

ある。そしてその知力、知恵の内容自体にもいろいろな違いがある。そういう違いがあるということをお話しして、最後に、新潟県立大学という公立大学の存在意義について少し考えてみたいと思います。

一言で、それこそ論理的・論証風に説明はできないのですけれども、いくつかの要素があるのです。一つは、我々がそのなかにいる一つの政治装置のデモクラシーの問題です。そのデモクラシーが健全に機能するためには地方分権が非常に重要な位置を占めます。デモクラシーというのは、バラバラの個人がいて、そして国家という権力があって、そこでバラバラの個人が何らの例えば政党の選択等々によって、自分の意思表示の投票をする。投票で代議員を選んで議会に送るという形で政策が一応形式的に決定するわけです。

ところが、基本的に決めるためには多数決原理がコアにあるわけです。その多数決原理でバラバラの個人が最終的に代議制で多くの人が良しとする意見で物事を決めていくというのは基本的に悪くないのです。しかしそのままでは、ある種の危なさを持っているわけです。中央集権と地方分権という考え方というのは、統治、ガバメントが、外交、軍事、貿易政策、出入国管理、通貨など一国全体が集権的かつ統一的に処理すべく中央に政府が一つある。地方それぞれの固有の問題、地方の住民が一番よく知っている問題については、行政として、そしてアドミニストレーションとして地方、県単位で取り組むのが基本的な発想です。

例えばアメリカとかイギリスのデモクラシーと比較すると、日本のデモクラシーは行政までもかなり中央集権化されている。教育の問題に関しても、国の統制が強い。教育にはいろんなレベルの問題が含まれますから、一言で集権化されているというのは語弊がありますが、小学校の例えば教科書はどういう教科書でなければならぬかとか、高校で使われる政治経済のテキストはどれぐらいの長さでないと駄目だとか、文部科学省の眼が光っているわけです。アメリカですと教育は日本の文部科学省なるものは連邦政府や州レベルでは存在しない。むしろ州よりも下位の行政機関であるタウンとかスクール・ディストリクトにそういうことは任されているわけです。

なぜ地方分権が大事かという点、そういうバラバラな個人と国家というものの対立構図だけで物事を決めていくと、個人は一人ではあまりに弱い存在になる。弱いからこそ、連携して例えば政党を作ったり、NPOを作り、「結社」つまりアソシエーションを作って連携するわけです。結社のような中間的な組織が無いと、そして地方分権がかなり成熟していないと、デモクラシーというのは意外に脆弱な面を持っていて。

この点は、アメリカ建国40〜50年経った後、フランス人の社会思想家であり、政治家、司法職にもあったアレクシ・ド・トクヴィルが、アメリカを視察して、アメリカ人はデモクラシーのもたらす物質主義と個人主義を回避するために、どのような装置をデモクラシーのなか

に組み込んでいるのかという分析をしています。そのなかで今申し上げた、徹底した地方自治の重要性を指摘しています。これは非常に重要なポイントです。自分のことは自分で決めるというのは自由の原則として大事なことです。同時に自分が住んでいる地域に関しては、自分たちが一番良く知っているわけですから、その地域の問題は自分たちで決めていく。そういうシステムが健全に機能している国家がいいデモクラシー国家なのです。これこそまさに福澤の命題ですよ。 「一身独立して一国独立す」という福澤の命題が実現される。一人一人が独立し、自分の住む地域の問題を考えると、最初、独立国家としてのいい外交が展開できる。福澤諭吉の言葉を引用すると、地方自治は外交の訓練だということになる。訓練というのは練習です。地方自治が立派にやれるまで成熟した国家が、初めて外交問題に対して、賢明かつ妥当な判断ができるというわけです。

そういう意味で、地方自治というのは非常に大事なことです。しかし日本は明治維新で幕藩体制が崩壊し、廃藩置県でもって強力な中央集権国家が出来上がる。その維新は大政奉還という形では無血の革命に成功したわけですけども、ただその後、皆さんご存知のように「不平士族の反乱」というのが起こります。佐賀、熊本、秋月、萩、そして最後の一番大きい「日本最後の内乱」と言われるのが西南戦争です。それはしばしば、武士のうち大名などの上級武士は華族令で華族になったけれども、それ以外のお侍さんたちは、士族ということで一括されてしまい、さして特権もなくて、士族公債はあつたけれども、経済的に武士の商法と言われたように、経済的自立が難しかったために起こった反乱だというふうに説明されます。

つまり内乱が起こった理由は、武士が経済的に困窮して爆発したという経済的要因を挙げるのです。間違っていないと思うのですけれども、もっと根本にあった原因というのは、日本の中央集権国家が藩閥を中心に東京で非常な力を持つてしまったところにあるのです。地方の各藩は、徳川の長い伝統で立派な藩校を持っていました。武士の教育は主に藩校で行われていた。その藩校で鍛えられた有能な人たちが、東京に行っても重要なポストはほとんど藩閥の出身者で占められている。地方の有能なひととは、経済的な機会も、政治的な機会も非常に限られてしまっている。不平士族の反乱は、そのような背景から起こったということを見逃してはならない理由だと思うのです。

ですからお金の問題だけではなくて、やっぱり各々地方、地域が、そこに定住して、その地域を良く知っている人が自分たちのことを決めてその地域のために貢献するという政治的枠組みになっていないことへの不満も大きかったのです。人材を各々の地域が育てるための動機づけがうまくなされていないという問題があったのです。この傾向は、実は現代でも解決されたわけではないようです。

アメリカではどうでしょうか。例えばアメリカの州立大学は、授業料がインステート（州の住人）の人と、アウトオブステイツ、つま

り州外の人とで授業料が大きく違いますね。アメリカの大学の授業料比較した、平均値を比較したりリストですけれど、我々がよく名前を聞く歴史のある私立のプリンストン、ハーバード、イエールといった研究大学院とリベラル・アーツ系のカレッジというのは、大体年間320万円ほどの授業料です。それに対して、州立大学は、平均が年240万円ぐらいでしょうか。ところがその州立大学で、インステートの人たちがその州の公立大学に行く場合は、私が見た2、3年前のデータでは、年間90万円前後です。ということは、リサーチユニバーシティの3分の1、ないし4分の1というわけです。そして州内であるか州外であるかを比べると2・5倍ぐらいの差がでている。

ということは、やはり州は税金を納めている人に対しての納税者意識に対して応えているという構造があるわけです。日本の公立大学はいまや国立大学よりも数が多いわけです。公立大学がどういう形でこれから戦略を練っていくかということは大いなる問題となるわけです。地方行政のなかに、高等教育の経営問題を専門とするような、文部科学省における高等教育局の仕事の一部のようなものに携わる専門人材を育て、独自の、そしてその地域の特徴を活かしたような公立大学の運営を考えていかねばなりません。優秀な学生を集める方法、卒業後の雇用機会の作り方と、問題は非常に錯綜して、一言で簡単な解があるわけではないのですけれども、そういう地域固有の魅力ある公立大学を作り、発展させていかれることを心より願っております。ご清聴いただきまして、ありがとうございます。

本日に今日はおめでとうございました。

参考資料

公、私、智、徳のマトリックス

(福澤諭吉『文明論之概略』巻之三、第六章「智徳の弁」より)

	私	公
智 (インテレクト)	物の理を究めて 之に応ずるの働 (工夫の小智)	人事の軽重大小を分別し 軽小を後にして重大を先にし 其時節と場所とを察するの働 (聡明の大智)
徳 (モラル)	(一心の内に属する) 貞実、潔白、謙遜、律儀など	(外物に接して人間の交際上 に見はるゝ所の働) 廉恥、公平、正中、勇強など

徳義（モラル）は「心の行儀」で、「一人の心の内に快くして屋漏に愧じざるもの」を指す。智（インテレクト）は、事物を考え、事物を解し、事物を合点する働きである。ここで福澤はさらにそれぞれを「公」と「私」に分ける。（この論の進め方は、明快で議論の深みを失わせない福澤らしい卓抜な技である）したがって、徳、智、公、私で、2×2のマトリックスが出来上がる。ではこれら4つ要素は各々具体的に何を指すのか。

1) 私智は物の理を究めてこれに応じる働きをさす。いわゆる受験秀才の多くはこのタイプの智恵に秀でている。碁知恵、算勘、すなわち碁が強い、計算が速いという能力もこの私智に属する。established knowledge はこれに関わるものがほとんどであろう。

2) 私徳は貞実、潔白、謙遜、律儀など、「対自的」な個人の範囲に限定された徳を指す。ときにメディアが好んで取り上げる金銭やセックス関係のスクandalもこの私徳に関するものがほとんどである。メディアが政治家を叩くときはこの私徳にまつわる醜聞が多い。

3) 公徳は廉恥、公平、正中、勇強など、いわゆる「対他的」「社会的」な徳である。正義の感覚に富んでいるか、大勢の前で少数意見でも堂々と発言できるか、フェアであるか、名誉を重んじるか、などにかかわる徳である。

4) そして最後の公智は、事柄の軽重大小を分別し、何を優先すべきかを時と場所とを察しつつ判断する働きを指す。この、「何が大事か、何を何に優先すべきか」の判断力は「聡明の大智」と呼ばれ、福澤が最も重視する智恵であった。

2019年10月25日
新潟県立大学
創立10周年記念講演

産業社会における大学の役割
— 学問と実践知 —

猪木 武徳

1. 「知」と「徳」の価値 ⇒ ただ生きるのではなく「善く生きる」ために
 - 1) 「頭がいい」という表現には様々な意味がある
 - 2) アリストテレス：徳（卓越性）をモラルとインテレクトを分ける
インテレクトをさらに知恵、知慮などに分ける
 - 3) 福澤諭吉の分類：「智・徳」における「公・私」を区別（添付資料参照）
 - 4) 日本では智と徳が狭く解釈されてきた：「私」の重視、木下藤吉郎の例

2. 教養とは何か、大学で何を学ぶか
 - 1) 日常的でない（マニュアル化できない）ものへの対応能力（福田恆存）
断片化した知識（雑学）ではなく「知識欲」⇒知るほどに未知の領域が広がる
 - 2) 人間の精神的遺産である「古典」を読み、人間と世界の不思議（人間が不完全であること、「運命」というものがあるようだ、ということ）を学ぶ
「真理」vs「真らしさ」、想像力（トピカ）から論理と厳密さ（クリティカ）へ
 - 3) Steve Jobs : Technology alone is not enough — it's technology married with liberal arts, married with the humanities, that yields us the results that makes our heart sing.

3. 新潟で学ぶことの意味 — 地方分権の重要性
 - 1) 地方分権はデモクラシーの土台をなす
福沢諭吉の『分権論』：個人 ⇒ 地域 ⇒ 国 ⇒ 外交
 - 2) 地域に定住し、その地域をよく知る人が、地域に貢献することの大切さ
地域の経済・産業・企業の仕組みを理解するだけでなく、立派な日本語を習得して思考力を高め、その上で外へと関心を広げながら外国語・外国文化を深く学ぶ
 - 3) 地域（個別）を知ることなしに世界（全体）を知ることにはできない

参考文献：福田恆存『私の幸福論』（ちくま文庫）は1950年代半ばに、女性誌に連載された文章。自分の将来を考える上で実に含蓄に富む智恵が記されている。アリストテレス『ニコマコス倫理学』（上下二巻、高田三郎訳、岩波文庫）と福澤諭吉『文明論之概略』（岩波文庫）は少し難しいかもしれませんが、将来いつか挑戦してみてください。

